

Musashino Journal

— 学校法人武蔵野大学報 —

武蔵野大学大学院
武蔵野大学
武蔵野大学高等学校
武蔵野大学中学校
千代田高等学校
千代田中学校
武蔵野大学附属幼稚園
武蔵野大学附属有明こども園

特集 挑戦が、学びになる場所。

徳之島で共生たんかんジャムのパッケージデザインに挑む
学部をこえてクラブ活動にチャレンジ!
それぞれの挑戦ストーリー。その一歩を、後押しする場所。
生徒・学生のチャレンジを教職員はどう支えるのか?
学生が考える居心地の良いキャンパスとは?



表紙コンセプト

学びの場は、可能性の出発点。これまで育んできた思いも、日々の学びや出会いの中で思いがけず心を動かされた関心も、自分らしい挑戦へとつながるだろう。そうして芽吹いた一歩が、やがて学外へと広がり、世界に新たな価値を生み出していく。今日も学生や生徒たちの挑戦が、確かな環境のもとで、静かに、力強く育まれている。

表紙イラスト：サタケシュンスケ

学校法人 **武蔵野大学**
Musashino Journal vol.42

2026年3月31日

学校法人武蔵野大学 広報課

〒135-8181
東京都江東区有明三丁目3番3号
TEL: 03-5530-7403
E-mail: kouhou@musashino-u.ac.jp
<https://www.musashino-u.ac.jp>

挑戦が、学びになる場所。

特集1 徳之島で共生たんかんジャムのパッケージデザインに挑む

武蔵野大学の1年次の必修科目フィールド・スタディーズ(FS)。2024年度に行われたプログラムの1つが、「鹿児島県SDGs未来都市 徳之島 宝をつなぐ・宝をつくるプロジェクト」です。10名の学生が世界自然遺産に登録されている自然

豊かな鹿児島県徳之島の暮らしを体験しながら、島の課題解決に取り組みました。その中から、絶滅が危惧されるアマミノクロウサギとの共生につながるフルーツジャムのパッケージデザインに挑戦した5名の学生の活動を紹介します。



町役場の方との打ち合わせの様子



空港にて。学部もさまざまな10名が徳之島へ

「島特産のフルーツを使ったジャム」を、もっと魅力的にするにはどうしたらいいか、リニールアルのコンセプトやネーミング、パッケージデザインをみんなで考えようというのが今回のミッションです。プログラムの期間は8日間。学生は、最初の4日間で徳之島の自然や文化を十分に体験しながら、さまざまなインプットを行いました。徳之島の食品加工センターで地元特産のフルーツ「たんかん」のジャムをいただき、町役場ではアマミノクロウサギと島民との共生についてヒアリングも。新田さん「徳之島では、絶滅危惧種に指定されているアマミノクロウサギの保護に取り組んでいますが、その一方で、農家の人が大切に育てたたんかんの木をかじってしまう被害が多くて困っていたそうです」

岩瀬さん「町役場では、たんかんの木の幹に保護ネットを付けてクロウサギとの共生を図ろうとしていました。人と自然、生き物が共に生きていく方法を見つけようとしているんです」

島の公民館では、下久志集落の方たちから熱烈

自然と共生する 離島の文化を体感

フィールド・スタディーズ(FS)とは、武蔵野大学のブランドステートメントである「世界の幸せをカタチにする。」人材を育むため、大学の外へ飛び出して、世界のさまざまな課題を見つけ解決に導くための力を身に付けようというプログラムです。1年生を対象とした基礎FSと全学年を対象とした発展FSがあり、国内外合計90以上のプログラムから自分にあったプログラムを選択することができます。基礎FSは毎年、大学の夏休みの期間に行われ、学生たちは自分が選んだプログラムに参加するため各地へと向かいます。

対話を重ねながら

コンセプトを導き出す

島の自然や人々の生活、文化に触れた4日間を経て、後半の4日間は、いよいよたんかんジャムのパッケージデザインづくりへ。まずはコンセプトを決めるためのディスカッションから始めました。

秦さん「さまざまなアイデアを紙に書き出し、壁に貼りながら、島民の方たちの思いと私たちの思いをどう伝えていくのか、とことんディスカッションしました」

新田さん「学部がバラバラな5人で、それぞれ視



たんかん農家さんのもとで取材



経営学科の学びとも関連する商品開発やマネジメントに関わってみたい！
経営学科2年生 新田 暦さん

地域と結びついた活動をしたい！ そう思ってこのプログラムを選びました。
日本文学文化学科2年生 池田 侑生さん

縁のなかった離島での活動で自分の視野を広げたいと思いました。
日本文学文化学科2年生 山中 千歩さん

プログラム紹介にあった「離島の幸せの持続」というサステナブルなテーマに惹かれました。
サステナビリティ学科2年生 岩瀬 彩名さん

未知の環境で自分の力を試して何かを成し遂げてみたかった。
ウェルビーイング学科2年生 秦 宇宙さん

Contents

特集「挑戦が、学びになる場所。」

- 2 特集1 徳之島で共生たんかんジャムのパッケージデザインに挑む
- 6 特集2 学部の枠をこえてクラブ活動にチャレンジ！

- 8 特集3 それぞれの挑戦ストーリー。その一歩を、後押しする場所。
- 10 特集4 生徒・学生のチャレンジを教職員はどう支えるのか？ | 中高大がつながり、教育改善を考えるFD研修会

- 11 特集5 学生が考える居心地の良いキャンパスとは？ | キャンパスの居住性向上ワークショップを開催!!
- 12 武蔵野大学中学校・高等学校 アメリカの学生に高校生が日本文化を紹介

- 14 千代田中学校・高等学校 社会課題に向き合い未来をデザインする「開発コース」
- 16 武蔵野大学附属幼稚園 年に一度の発表会で園児たちの成長を実感!
- 18 武蔵野大学附属有明こども園 元気いっぱい! 「うんどうあそび」で体と心を育む

- 20 「学問の地平から」 教員が語る、研究の最前線
- 22 NEWS&TOPICS
- 23 Pick up! 通信教育部に新設! 記者発表会を開催 国際データサイエンス学部の特徴を発信
- 24 建学の精神 学祖 追想

- 25 学校法人武蔵野大学後援会
- 28 裏表紙/表紙解説

読者アンケートにご協力ください。右の二次元バーコードよりアクセスできます。





フィールド・スタディーズに参加して



岩瀬さん

積極的に意見表明ができるようになり、学外活動への参加も増えました。



山中さん

自分の考えを丁寧に伝えることの大切さが分かり、参加する前より少しだけ積極性が増したかなと思います。



新田さん

生産者支援への関心が高まり、2年次の発展FSではお弁当販売プロジェクトに参加しました。



池田さん

多面的な視点の重要性を学びました。文学作品の創作や評価に関して相手の気持ちを考える姿勢が身についたと思います。



秦さん

グループワークで他者の意見を聞く重要性を実感しました。学部での地域・企業連携プロジェクトにも活用しています。



アイデア出しの様子

コンセプトが決まり、次はネーミングとパッケージのデザインです。ここでもさまざまなアイデアが飛び出しましたが、最終的に午前7時というたんかんの収穫時間と朝食にジャムを食べる時間をつなげた「午前7時のHitotoki」、果汁感を重視し徳之島の恵みであることを伝える「徳のひとしずく」、共生への取り組みに対してアマミノクロウサギから農家さんへの「恩返し」の気持ちを含め

商品開発はネーミングとデザインも重要

点が違うので、なかなか考えがまとまらず、話し合いが夜まで続くこともありました。」議論の末、ようやく「徳之島とつながる」として私に自然に生きる」というコンセプトに辿り着きました。そこには、島の人たちがこれまで大切にしてきた自然とのつながりを残し、広く知ってもらいたいという思いが込められています。

岩瀬さん「毎日、ディスカッションの前後にチェックインとチェックアウトの時間があって、チェックアウトではその日を振り返るのですが、ある夜は海辺に出て、みんなで寝転がって星空を見ながら行いました。あの時間は忘れられない思い出です。」

山中さん「チェックインやチェックアウトでは自分の考えをうまく言語化できずに苦労したこともありましたが、みんなが話を一生懸命聞いてくれてうれしかったです。」

完成した商品が共生の理念を伝える

学生たちの想いのこもったアイデアを受け取った徳之島町役場の方々は、これをなんとか形にしようと、その後、共生たんかんジャムの生産ラインを構築。学生たちはリモートで町役場の方々やパッケージデザイナーとミーティングを重ねながら、パッケージに載せる文言やウサギのイラストの最終調整を担当。夏の活動後、約1年をかけてついに「アマミノクロウサギ共生たんかんジャムあときのウサギです」を守ってくれてありがとう」が完成します。

商品完成後の成果について、町役場の堀貴久さ

た「あのとときのウサギです。助けていただきありがとうございます。という3つのネーミング案をセレクト。それぞれにデザインを2案ずつ考えて計6案を提案しました。」

梅田先生「あのとときのウサギです。」の案は、「お堅い自然保護」ではなく「顔見知りの距離感」をうまく表現している点が秀逸でした。最終的に、「助けていただき」「守ってくれて」のほうがしっくりくるということで「コピー」がまとまりました。」

パッケージデザインではアマミノクロウサギのイラスト制作が重要な要素に。

岩瀬さん「実際のクロウサギは一般的なウサギのイメージよりも丸っこい体型なので、可愛らしさを表現しつつ、パッと目を引くデザインが必要だと感じました。」

短い期間でよく考えてくれたと、学生たちの提案に町役場の皆さんからは高い評価をいただきました。こうして8日間の活動を終え、学生たちは貴重な体験を胸に島の人たちに別れを告げてキャンパスへ帰りました。



チェックイン・チェックアウトの様子

んは、「インパクトのあるデザインとネーミングに私たちもよろこんでいます。羽田空港で販売イベントを行った際、「これ可愛い」とパッケージに反応するご家族連れもいましたね。ふるさと納税の返礼品としても好評で、ジャケ買いする方もいます」と反響を教えてくださいました。

同じく町役場の和倉辰宜さんは、「当初、クロウサギを書獣として嫌っていた農家さんが、保護活動とジャムづくりを通じて意識が変化して、今ではクロウサギの巣穴を発見したとうれしそうに役場に報告してくるほど関心を示すようになりました。これは、ジャムづくりを通じて共生の理念が浸透してきた何よりの証でしょう」と語ります。現地コーディネーターとしてプログラムの運営をサポートした福本さんは、「学生たちの熱意と集中力が大きな感動を受けました。やはり若い世代のパワーが地域活性化には不可欠だと痛感しましたね」と話します。

このプロジェクトを通じて、思いを持った人間同士が力を合わせると、想像を超えた成果もたらされるのだと実感しました。これからも武蔵野大学さんとの連携を20年、30年と継続していけたらと考えています（堀さん）

担当の先生から MESSAGE

島の方たちから得た一次情報を整理しながら、大切にしたいことや伝えたいことを一つの商品に落とし込んでいくのは容易ではない道のりです。学生たちは、限られた時間の中でモチベーションを高く持ち続けながら、粘り強く対話を重ね、創造的な活動に取り組んでくれました。このプログラムの最大の目標は、「社会の傍観者から、運営者へ。価値の消費者から、生産者へ」という姿勢の転換です。結果として学生の成長と地域貢献の両立が実現できたのではないのでしょうか。

梅田 大輔
客員講師。現役コピーライター。発展FS「コピーライティングプログラム」担当講師。基礎FSの「徳之島FS」は2021年から担当。徳之島でも取材や伝え方のスキルを学生に指導



フィールド・スタディーズを支える学外学修推進センター事務課

キャンパスを飛び出し、世界が直面する課題に気づき、解決していくための想像力と実践力を養う武蔵野大学独自のプログラム、フィールド・スタディーズ(FS)。学外学修

推進センター事務課は、FSプログラムの裏方として、学外学修の設計や実施条件の整備、宿泊プログラムの拠点確保、現地協力者との調整などを担っています。また、教員からのアイデアを授業の枠組みに落とし込む調整作業なども行います。プログラムは、東日本大震災のボランティア活動をきっかけに始まり、徳之島とは2014年から12年にわたるつながりがあります。当初は職員主導のプログラムだったところ、徐々に教員を巻き込みながら教育的側面を強化し、いまの形に発展しました。今後もプログラムの質と量の両面での発展を目指し、シュレイト・サクセスの実現に向けて学生たちによりよい学びの機会を提供するとともに、連携先の方々にも喜んでいただけるようなプログラムを展開していきます。

FSの詳細はこちら



バドミントン部 03

📍 主な活動場所 武蔵野キャンパス 第1体育館

📅 活動頻度 週3回(月、水、土)

Q 松下さんはいつからバドミントンを?

A. 中学生の時。顧問の先生や仲間たちが、努力して強くなることや羽を打つことの楽しさを教えてくれました。その経験が、今でもバドミントンを続けられている理由だと思います。

Q 一番アツかった瞬間は?

A. 高いレベルの人たちと試合ができること! 全国レベルの部員からのアドバイスなどもとても役に立っています! 地方出身の部員が多いので、ローカルな話題で盛り上がることも(笑)



Q 初心者でも大丈夫?

A. 経験者と未経験者は2:1くらい。初めてだと思うように打てず苦戦することもあります。教え合ったり上手な人のプレーを見たりしながら成長しています。今では経験者と接戦を繰り返している部員も!

部長からひとこと!

ライバルでありながらも仲が良いのがバドミントン部の魅力。互いに成長し合うことで、部全体が活気に溢れていくと思うので、羽を打つのが楽しいと思ってもらえるような部活動にしていきたいです!

ウインドアンサンブル 02



📍 主な活動場所 武蔵野キャンパス 4号館

📅 活動頻度 週2~3回(主に火、木、日)

Q 岩淵さんのパートは?

A. 打楽器(パーカッション)パート。中学生の頃に顧問の先生が決めてくださいました。その派手さと楽器の種類の多さが魅力的で、大学でも楽しく続けられています!

Q パート同士は仲がいい?

A. 打楽器も他のパートもプライベートでよく遊びに行きます。部活内では、先輩が後輩に丁寧に指導しながら、同じ音楽をつくる仲間として意見を出し合い、互いに高め合う関係が築かれています。

Q 初心者でも大丈夫?

A. 約3割が初心者。未経験の方も大歓迎です! 先輩が丁寧に教えてくれるから、安心して挑戦できる環境が整っています。初めての方も練習を重ねることで、自信を持って演奏会に出演できるまでに成長しています!

部長からひとこと!

約70名が所属する部活を引っ張っていくのは不安もありますが、周りとの力を合わせて頑張っていきたいです。部員が“所属してよかった”と思える部活動づくりに努めていきます!

武蔵野大学のクラブ活動
一覧はこちらから



和太鼓 01

📍 主な活動場所 武蔵野キャンパス 武道場、雪頂講堂

📅 活動頻度 週2~3回(曜日不定)

Q 吉野さんが和太鼓を始めたきっかけは?

A. ずっとサッカーをしていましたが、大学では全く違うことに挑戦してみたいと思い、1年生のときに和太鼓の体験に参加しました。そこで「カッコいいな!」と感じたのがきっかけです。

Q どんなところで演奏するの?

A. 大学祭(摩耶祭、黎明祭)をはじめ、招待していただいたイベントや地域の小学校などさまざまな場所で演奏します。練習ではメリハリをつけること、一つひとつの動作を意識して細かい部分にもこだわることを大事にしています。

Q 初心者でも大丈夫?

A. メンバーのほとんどが未経験者! みんな練習を重ねるごとに日々成長を感じています。

部長からひとこと!

部員同士とても和気あいあいとしていて、ほとんどが未経験からのスタートです。みんな同じスタートラインなので興味のある方はぜひ体験に来てください。お待ちしております!



※学年は取材当時(2026年2月)のもです



ソサイチサークル 04

📍 主な活動場所 武蔵野キャンパス 松芝園グラウンド

📅 活動頻度 週1~2回(主に水、金)

Q ソサイチって何?

A. ブラジル発祥の7人制サッカーです。一般的な11人制サッカーの半分くらいのコートで、ボールはサッカーの5号球と同じ。でも少し重くてあまり跳ねないのが特徴。

Q 初心者でも大丈夫?

A. 3割がサッカー初心者です。マネージャーとしてサークルを盛り上げてくれる仲間もいます!

Q 飯野さんがソサイチを始めたきっかけは?

A. 小学生の頃みたいにみんなで楽しくボールを蹴りたい! という思いで立ち上げたサークルです。日本では知名度が低く、初心者の方も入りやすくして反響があるかなと...

Q 一番アツかった瞬間は?

A. 最高の仲間に出会ったこと! このサークルを通して、ドリブルが上手い人、芯のある人、大きな目標がある人、シンプルに面白い人などさまざまな人に出会えました!

部長からひとこと!

初心者も、学年や年齢、学部が違って、言語や宗教が違って、ボールを蹴ればみんなTOMODACHI! 最初はとも勇気がいるかもだけど、一緒に楽しもう!



飯野 昊さん
ソサイチサークル
ウエルビーイング学科2年

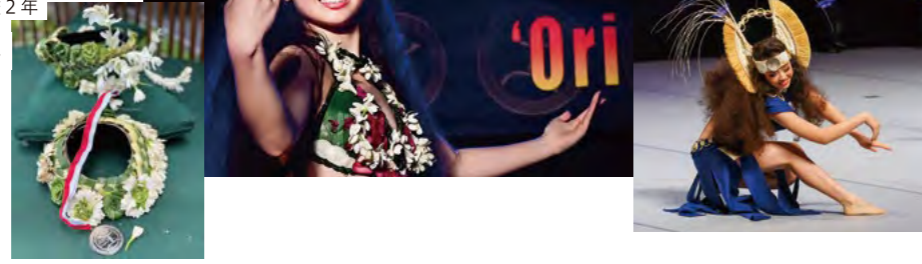
松下 花さん
バドミントン部
幼児教育学科2年

岩淵 風南さん
ウインドアンサンブル
日本文学文化学科2年

吉野 翔さん
和太鼓 隼
経済学科2年

03

武蔵野大学中学校2年
関口 琴羽さん



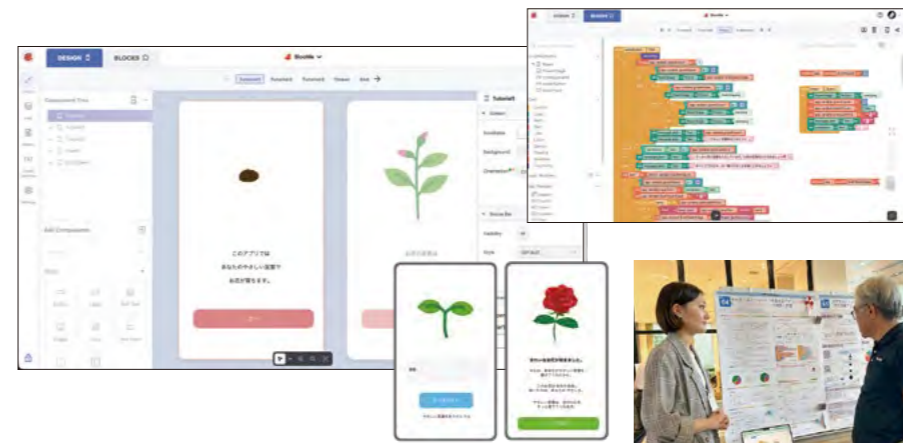
ステージに上がった瞬間、違う自分になる

普段は人前に出るのも苦手な私が、タヒチアンダンスのステージに上がった瞬間、まったく別の自分になれる。その感覚がたまらなく好きなんです。タヒチアンダンスはポリネシアのタヒチ島に伝わる伝統舞踊で、激しい腰の動きにあわせてステップを踏むのが特徴です。私はタヒチで開催された2024年の国際タヒチアンダンスコンペティション(12-14歳部門)で2位を獲得し、2025年の全国大会(13-17歳部門)では優勝しました。小学校1年生でタヒチアンダンスをはじめたのも、大会で技術や表現力を競うことが負けず嫌いな私にピッタリだと思ったからです。月5回のレッスンに加え、毎日の自主練も欠かせません。正直、サボりたくなる日もあります。そんなときは、優勝できなかったときの悔しさを思い

出して自分を奮い立たせます。実は、全国大会では長い間2位どまりでした。しかし、コロナ禍の自粛期間にひたすら練習を重ねることで壁を突破し、優勝することができました。練習は裏切らない。努力は必ず結果につながると実感しました。世界大会では、現地の人々のタヒチアンダンスへの情熱が圧倒的な迫力で伝わってきて、「やっぱりタヒチアンダンスっていいな」と改めてその魅力を実感しました。勉強とダンスを両立できるのは、大会で欠席しても勉強が遅れないよう気遣ってくださる先生方や両親のおかげです。応援してくれる人たちのためにも、世界一になりたい。これからも夢を叶えるために、精一杯頑張ります。

01

人間科学部
人間科学科3年
加藤 杏奈さん



心理学×AI 副専攻で発見した“新しい自分”

主専攻の心理学に加えて、副専攻のAIエキスパートコース(AI副専攻)でも学び、その集大成としてセルフ・コンパッション(自分への思いやり)を育むオリジナルアプリ「BlooMe(ブルーミー)」を開発しました。AI副専攻に挑戦したのは、漠然としたAIやアプリへの好奇心からです。ただ、実は私は数学が苦手で、大学入学までAIやプログラミングに触れたこともありませんでした。最初は不安だったのですが、AI副専攻の先生方や先輩方にサポートしていただいたおかげで、目標としていたアプリ開発を実現させ、成果発表会では優秀賞をいただくことができました。本当にうれしかったです。副専攻で学ぶことの魅力は「知らなかった自分に出会える」ことにあ

ると感じています。私自身、AI副専攻での学びを通して「私ってこんなこともできるんだ!」と思うことが何度もありました。AI副専攻は、私のように「文系で漠然とAIに興味がある」という学生こそ、挑戦すると全く新しい道が開けるように思います。また、学部を超えた交流が生まれ、同じ武蔵野大学の学生としての連帯感をもつことができるのも、副専攻で学ぶ良さだと思います。心理学の世界では今、AI活用の動きが活発化しています。将来は大学院に進学し、公認心理師の資格を取得したいと考えていますが、これからもAIの動向に常にアンテナを張り、新しい時代に対応した心理的ケアを模索していきたいと思っています。

特集3 それぞれの挑戦ストーリー。その一歩を、後押しする場所。

武蔵野大学、各設置校で挑戦する 学生・生徒のチャレンジを紹介します。

04

千代田高等学校1年
萩野 蒼大さん



社会への視野を広げたラボ活動と留学

研究コースの経営戦略ラボに所属して、新潟県の食用菊「かきのもと」を使った商品開発を進めています。現在は、かきのもとと世羅茶(緑茶)などをブレンドしたオリジナル茶の開発に取り組み、配合比などを試行錯誤しているところです。大妻女子大学千代田キャンパスで行われる「大妻さくら祭り」での販売を見据えて、商品名やパッケージ案を考え、利益が出る価格設定も検討しています。講師であるコンサルタントの方と話していると、小さなアイデアが大きく展開していくことができ、アイデアをためらわずに発信する大切さを実感しています。また、官民協働の留学支援制度「トビタテ!留学JAPAN」の奨学生に採用され、夏休みに、世界最先端の電子国家といわれるエストニア

のタリン大学に1か月間留学しました。留学中は、電子立国の仕組みや成功要因を探るとともに、その背景にあるエストニアの文化への理解を深めました。その結果、エストニアには自然を重んじる文化があり、自然と共生するためにデジタルが発展したのではないかと考察をまとめることができました。現地での国際交流イベントでは、自分が得意なけん玉の技を披露し、出汁や扇子を紹介してみんなと盛り上がり、とても楽しかったです。「トビタテ!」の選考は6倍以上の倍率だったのですが、先生方に申請書類や面接対策でアドバイスをいただき、無事突破することができました。ぜひ皆さんにも「トビタテ!」にチャレンジしてほしいです。

02

経営学部
会計ガバナンス学科3年
千葉 陽彦さん



ミスしても大丈夫! 留学で実践を積む

中学生のとき、サッカー遠征先のオランダで英語が話せなくて悔しい思いをしました。現地の同世代の子たちは母語でない英語を普通に話しているのに。英語ができないと世界で戦えない——それがウェスタンミシガン大学への協定留学を決意した理由です。留学当初は、完璧な英語を話さないといけないと思いましたが、多少文法が間違っても気にしないコンゴ人留学生を見て、「大切なのは伝えること」だと気づいたんです。それからは現地の人に片っ端から話しかけました。でも、今度は相手の言葉がなかなか聞き取れず……。突破口となったのは、現地の女の子と仲良くなったことでした。何度も聞き返しながら、マシンガントークに食らいついていくうちに

英語耳の“筋肉”が鍛えられたのかもしれない。次第に難なくコミュニケーションできるようになりました。留学前から伴走してくださった大学の国際課やアドバイザーの先生の存在は心強く、さまざまな場面で助けられました。今度は自分が留学を考えている後輩を応援する番だと、留学フェアで経験談を発信するなど広報活動にも積極的に協力しています。とはいえ、留学は大学生活の通過点でしかありません。まずは留学で何をしたいのか、自分としっかり向き合ってほしいと思います。私は今、留学経験を武器に、会計や経営分野で企業のサポートをしたいと思い、米国公認会計士資格取得を目指して勉強中です。

中高大がつながり、教育改善を考えるFD研修会

生徒・学生が「豊かで生き生き」と学ぶために教職員はどのようなサポートができるのでしょうか。12月23日、武蔵野キャンパスで開催された『令和7年度第5回目的別FD(ファカルティ・ディベロップメント)研修会』では、法人内の中学校・高等学校・大学の教職員が垣根を越えて情報交換し、多角的な議論を交わしました。



響学開発センター
センター長 鈴木 克明 教授

教科書で得た知識を
実体験につなげるために

はじめに研修会を主催する響学開発センターの鈴木克明センター長が、「情報交換しながら良い取り組みを『情報のお土産』として現場に持ち帰ってほしい」と会のねらいを説明してスタート。各校から代表の先生が1名ずつ発表を行う形で進めました。

武蔵野大学中学校・高等学校で社会科(公民科)を担当する吉澤颯生先生は、「豊かで生き生きとした学び」を教科書の知識を実生活や実体験と繋げる工夫をテーマに発表。吉澤先生は「学ぶことの楽しさや必要性を感じられる学習を大切に、日常と教科の横断的なつながりを重視した授業を実践しています。社会科は暗記科目と思われるがちですが、公共という授業の特性を活かして体験を重視した学びを取り入れています。」

授業の事例として、「新聞発表から考える世界情勢」自分の考えは過去の思想家の誰に近いのか「学校の歴史から学ぶ平和学習」などを紹介。生徒自らが考える実践的な授業を通して「自己理解を深めていくこと」「他者の意見や考えを知り、視野を広く持つこと」の大切さを伝え、さまざまな問いや疑問に対して自分なりの正解や考えを見つけてほしいと語りました。発表後、参加者

からは実践的な取り組みに対する関心や質問が寄せられ、「答えのない問い」にどう向き合おうかという教育のあり方などについて活発な議論が交わされました。

学生の課題に対応する
カリキュラムを超えた教育

続いて、武蔵野大学アントレプレナーシップ学部の高松宏弥准教授が「学術的バックボーンに乏しい学生への研究指導実践：アントレプレナーシップ学部」をテーマに発表しました。同学部は起業に限らず多様な進路選択の支援を目指しており、特徴として、実践中心のカリキュラム、教員のほとんどが現役の実務家、1年次は全員寮生活であることが挙げられました。学生からは進



武蔵野大学中学校・高等学校
吉澤 颯生 先生



アントレプレナーシップ学部
高松 宏弥 准教授



千代田中学校・高等学校
堀内 陽介 先生

路の悩みやアカデミックな学びへの関心、起業家としての適性に対する不安などの声も寄せられ、高松先生はカリキュラムの枠を超えた教育の必要性を感じたといいます。その対応として、学術的研究経験やアカデミックライティングの指導を行うゼミナルプロジェクトの実施、学会発表や論文寄稿の機会提供などを行い、成果を上げています。質疑応答では、実践志向の学生に対する学術的指導の難しさなどについて意見が交わされました。

遊ぶように学ぶ
自由な教育環境の成果

千代田中学校・高等学校で数学を担当する堀内陽介先生は「千代田の数学教育実践」生徒が生き生きと学ぶために「遊ぶ」をテーマに発表。堀内先生は「遊ぶように学ぶ」を基本姿勢に、教科書の類題



グループに分かれてディスカッションをする様子

発表後の意見交換では、「授業の進め方だけでなく考え方のものが参考になった」「自分の授業を見直すきっかけになった」などの意見が交わされ、参加者はそれぞれ「お土産」を持って教育の現場に戻りました。

特集5 学生が考える居心地の良いキャンパスとは？

キャンパスの居住性向上
ワークショップを開催!!

5号館に張り出された学生たちの意見と共感の投票

20名、伊藤研究室の学生6名が参加し、複数のグループに

ワークショップの詳細・学生の声はこちら



12月3日、有明キャンパスで「キャンパスの居住性向上ワークショップ」を開催しました。本ワークショップは、学生が主体となってキャンパスの「居心地の良さ」について考え、改善に向けたアイデアを提案することを目的とした取り組みです。当日は学生部長であり工学部建築デザイン学科の伊藤泰彦教授をはじめ、グローバル学部日本語コミュニケーション学科の神吉宇一教授、同学部グローバルコミュニケーション学科の島田徳子教授、公募で集まった学生20名、伊藤研究室の学生6名が参加し、複数のグループに

分かれて意見交換を行いました。ワークショップでは、他大学の施設事例紹介を踏まえ、「キャンパスにあれば便利・快適な施設」をテーマに議論を展開。有明キャンパスの図面や模型を使いながら、「屋上で運動できるスペース」や「靴を脱いでくつろげる癒しの空間」「オンライン授業を受講できる個室」など、学生ならではの視点による具体的な提案が挙がりました。ワークショップ後も、学内で意見を共有する機会が設けられ、より多くの学生の声をキャンパスづくりに生かす取り組みが進められています。

休みたい、休憩スペースがない!	いいね!投票
<ul style="list-style-type: none"> 安楽ラウンジにカウンターを確保 外には屋根がほしいテラス席 くつろげるようにくつろぎ座 ソファを置く 	
<ul style="list-style-type: none"> 1号館1階の教室を学生ホールにする お風呂の設置 サウナの設置 アニメルカフェの設置 足 	
<ul style="list-style-type: none"> 風呂、サウナ、スバ、アニメルカフェ 1号館1階の、通路にベンチやテーブルを置く(テラスの様なイメージ) 1号館1階の教室 → 学生ホールにする 	
<ul style="list-style-type: none"> 映画館、カーペットでもいれたいから寝る、講座、ソファ サウナ・テレビ・カプセルホテル お菓子自由で食べられる ソファ 5号館1階 大階段のうしろにくつろげるスペースと、大階段の下に目かくしくつろぎ座 ソファを置いて着替える場所にも 	
個人スペースがない!	いいね!投票
<ul style="list-style-type: none"> 個人利用できるオンライン受講スペースを設け、その他個人利用できるスペースをつくる。 研究室、個人オンライン受講スペース、個室休憩 	
睡眠スペースが欲しい!・泊まりたい!	いいね!投票
<ul style="list-style-type: none"> 一人分の仕切りがあるスペースを用意して、寝る 休まれる場所をつくる。 1つの教室に自由に寝る 自由にできるスペースをつくる。ベッドを配置。 ソファ・ヨガボール・マッサージチェアを置くように。 廊下の空きスペースにハンモック、イスの設置 	
<ul style="list-style-type: none"> ベッドの配置、ソファ、ヨガボール、休憩室設置、マッサージ エア 	





武蔵野大学 中学校・ 高等学校

アメリカの学生に高校生が日本文化を紹介

武蔵野大学高等学校PBLインターナショナルコースの1年生が、アメリカの大学生を招いて国際交流会を開催。主体的に行動するマインドと語学力を発揮して、日本の伝統文化やポップカルチャーを紹介しました。

武蔵野大学高等学校PBLインターナショナルコースでは、生徒たちがPBL（課題解決型学習）の実践と英語教育を通して国内外の問題に対する関心を高め、課題解決に向けて協働する力を伸ばしています。同コースでは、校内でも英語を使って国際交流する機会を提供し、毎年「国際交流会」を行っており、今年度は1月13日に実施されました。

日本のポップカルチャーに 関心を持つ大学生が参加

今回招待されたのは、日本のポップカルチャーを学ぶ短期プログラムで来日中のアメリカ人大学生53名です。生徒たちは、大学生の興味関心に合わせて「Recent Japan（最近の日本）」を全体のテーマに設定。伝統的な日本文化と自分たちの若者感覚を掛け合わせ、「音楽」「アニメ」「ゲーム」「駄菓子」「茶道」「ラ

メン」の6つの体験型ブースを設けて大学生を迎えました。



PBLインターナショナルコース長 桑原千鶴先生

ウェルカムセレモニーでは、軽音楽部がいきものがかりの「SAKURA」を生演奏し、大学生の大きな歓声と拍手で会場が和やかな雰囲気。続いて、武蔵野大学高等学校の原田豊校長が、アメリカでも人気の漫画「鬼滅の刃」の話題も交えながら「アニメやゲームだけでなく、日々の生活も文化の一部です。高校生といるいろいろな話題で会話して楽しい時間を過ごしてください」と英語で歓迎のスピーチを行いました。その後、6グループに分かれた大学生は、生徒たちの案内で体育館や教室に設けられた各ブースを巡り、さまざまな日本文化を楽しみました。

箏からラーメンまで 体験ブースはアイデア満載

音楽ブースでは、デモンストレーションとして生徒3人が箏（こと）でボカロイド曲の「千本桜」を演奏し、大学生も一人ひとり箏爪を付けて「さくらさくら」を弾いてみることに。生徒たちは

英語をツールとして人と関わる コースの学びが生徒を後押し

交流会で印象的だったのは、生徒たちが状況に合わせて主体的に動き、初対面の大学生とも臆することなく英語でコミュニケーションを取る姿です。そうした生徒たちの力は、PBLインターナショナルコースの日頃の学びの中で培われたものだ、と、コース長の桑原千鶴先生は言います。

「英語のスキル以上に、アントレプレナーシップ講座などを通して人と関わって協働していくマインドセットをつくってきたことが、生徒たちの動きを後押ししたと思います。準備も当日も教員はほとんど介入せず、生徒に全て任せていたので、内心ヒヤヒヤした時もありました。それでも信じて見守り、その中で生徒たちは大きく成長してくれました」（桑原先生）

また、担任の新井先生は、生徒にとってこの交流会が、英語を学ぶことの意義に気付く機会になったと感じています。

「交流会後、生徒が『英語を勉強してきてよかった』と言ってくれたことが印象的でした。今回、英語で交流して感情を共有できたことで、英語を使えば世界中の誰とも同様に交流できる、ということも分かったはず。今日の経験は生徒の自信になったと思います」（新井先生）
アイデアを形にするために主体的に行動し、英語で交流する楽しさを味わった生徒たち。世界に目を向け、自分の目標に向かって成長する糧となる、貴重な経験となりました。



担任 新井 潤之介 先生

マンツーマンで教えながら、うまくできると「OK!」と笑顔で盛り上げました。抹茶を点てる体験ができる茶道ブースでは、生徒たちが茶席での作法を簡単に紹介。茶席ならではの「お先にいただきます」「お手前ちようだいいたします」というあいさつも教え、大学生は新しく覚えた日本語を使って日本の伝統文化を楽しみました。

日本のポップカルチャーの代表格であるゲームのブースでは、海外でも大人気のレースゲーム「マリオカート」で生徒たちが大学生と対戦。アニメブースは、海外でも有名な日本の漫画のタイトルを当てるオリジナルのゲームや、ポケモンキャラクターを折り紙で作るコーナーで大学生を喜ばせました。

また、ラーメンブースの企画は、さまざまな種類のカップ麺を用意し、お気に入りの味を見つけてもらうというもの。各カップ麺のアルギン情報をお示し上で、「一口ずつ味わってもらおう」と「あれがおいしかった!」「私はこれが一番好き」と反応は上々。中には、気に入ったラーメンをおかわりする大学生も。駄菓子屋の雰囲気再現した駄菓子ブースでは、粉と水を混ぜると色が変化する駄菓子づくりを体験しました。少し複雑な工程も、生徒たちがガステップずつ丁寧に教え、無事に完成。駄菓子に関するクイズでも盛り上がり、あちこちで別れを惜しむ姿が見られました。

2時間ほどの交流会ですっかり仲良くなった生徒と大学生たち。最後に学習用タブレットと一緒に写真を撮ったり、笑顔で握手やハグをした。



Snack



Tea



Music



Anime



Ramen



Game



社会課題に向き合い未来をデザインする「開発コース」

千代田中学校・高等学校では、開発コース、LAP（リベラルアーツプロジェクト）で生徒たちが自ら社会課題を発見し、社会人講師の指導を受けながら解決に取り組む実践的活動が展開されています。

海洋ごみでアクセサリ製作



中2・3 アントレプレナープロジェクト



コーヒーかすでキャンドル製作

前回の試作ではコーヒー粉が透けて
デコレーションも上手くいかず...

千代田中学校・高等学校では2025年から「研究コース」「開発コース」の2コースがスタートしました。「開発コース」では、これまで展開してきたLAP（リベラルアーツプロジェクト）を元に、中学から高校まで段階的にステップアップしていくカリキュラムを構築。活動には、第一線で活躍する実践家が講師として参加し、生徒たちはさまざまな社会課題に向き合いながら、自己の可能性が広がるプロジェクトにチャレンジしています。

中学1年生…全員でドキュメンタリー制作に挑戦

中学1年生は、年間を通して自己理解・他者理解・社会へのまなざしを学び、リベラルアーツの基礎を身に付けます。現在生徒たちが取り組んでいるのは、人気観光地・鎌倉の課題解決につながるドキュメンタリー動画の制作。

鎌倉は現在、オーバートゥリズム、ごみ放置など、さまざまな問題を抱えています。そこで生徒たちは、「鎌倉の『今』と『未来』」をテーマに、グループごとにどんな課題があるかを考え、現地でインタビュー取材や動画撮影を実施しました。この日の授業では、撮影した素材を組み合わせて、1本の作品に仕上げる編集作業がスタート。生徒たちは、タブレット端末で撮影した地元の方へのインタビューや観光名所の様子を切り取り、全体の構成を組み立てたり、取材の音声で文字起こししてナレーションやテロップを考えたりする作業を行いました。

制作全体を通して、元テレビ局のディレクターや

動画制作の専門家からアドバイスをを受け、生徒たちは、単に動画を作るだけでなく、「誰に何を伝えたいか」という目的も意識しながら取り組んでいます。

中学2・3年…分野ごとにプロジェクトに取り組む

中学2・3年生は、起業、農業などの分野から希望するプロジェクトを選択し、具体的な企画や実践がスタートします。

プロジェクトの一つ、「アントレプレナープロジェクト」では、廃棄される「コーヒーかす」をキャンドルにアップサイクルするアイデアを考え、グループが、川崎市で行われたビジネスピッチコンテストに出場し、企業とのマッチングに成功しました。現在は自分たちの手で試作品を作って色合いや質感を改善し、商品化へ一歩ずつ前進しています。また、海洋ごみを使ったアクセサリを製作しているグループは、昨年、作った製品を商業施設や藤華祭で販売しました。具体的な購買者をイメージしてデザインや価格を考えるなど、マーケティングの視点も大切にしているといえます。

アントレプレナープロジェクトで講師を務める伊藤沙也加さん（起業家、ジュエリーデザイナー）は、「ものづくりをしてアウトプットする授業ではありますが、まずどんな社会課題があり、それをプロジェクトでどう解決できるかを各グループが考えることからスタートしています。主体的に取り組む生徒たちの熱意に、私も刺激を受けています」と話します。

また、「農業プロジェクト」は、生産部、研究開発部、広報部に分かれ、野菜の栽培やその野菜のブランド、販売などの活動を行っています。中でも、研究開発部が取り組んでいるのは、企業から借り受けた水耕栽培システムで野菜を栽培し、生育や食味に与える影響を分析、考察する研究です。生徒たちは、毎日生育を確認したり液肥を与えるタイミングを考えたり、試行錯誤を重ねながら、アイデアを出し合ったり活動しています。実験では思うように成果

この小さな粒々が種



中2・3 農業プロジェクト 研究開発部-水耕栽培-

が出ないこともありませんが、仲間と好きなことを探究する楽しさを実感しながら、科学や農業への関心と理解を深めています。

高校1年生…社会実装に向けて活動が深化

高校1年生になると、より抽象的な概念をテーマとする「ゼミ」に分かれ、課題発見から解決策の実践に至るまで、複数のチームをつくって取り組んでいます。

「Social Innovationゼミ」では、自分たちの暮らしをリデザインする企画を考え、企業や行政が主催するイベントで提案し、社会実装を目指して活動しています。その中でも、RPG（ロールプレイングゲーム）風にスケジュールを管理するアプリを開発したグループは、川崎市のビジネスピッチコンテストで企業とのマッチングに成功しました。その過程では、ニーズや予算の検討、Pythonを使ったプログラミングなどにも挑戦。アイデア出しからものづくりまで、実社会での運用を視野に入れてプロジェクトを進める経験を積みました。

ゼミで講師を務める須之部為師さん（ホリプロ川崎プロジェクト副部長）は、開発コース1年目から外部のコンテストに参加したことで、生徒たちの本気が引き出されたと感じたと言います。「オープンな場で発表する緊張感が完成度を高めるのではないかと、期待も込めてプロジェクトをスタートさせました。できたもののレベルはまだ決して高くないのですが、生徒たちは、コンテストに出てようやく本当に活動が面白くなったようですね」

この日の授業では、須之部さんと恒木健太郎さん（専修大学経済学部教授）が講義を行い、プロジェクトの実現に不可欠な経済理論や組織論についても理解を深めました。専門的知識と実践の両輪で学びを進め、社会に新たな価値を生み出すための取り組みが続いています。

テロップをつける編集作業中



中1 ドキュメンタリー動画制作



RPG風にスケジュール管理

私たちの作りたいもの
私の人生をRPGにするアプリ

1. クエストとして可視化
 - ・日常生活における行動や習慣を、目的意識として明確に定義することで、取り組む
2. クエストの設定
 - ・各クエストには達成条件や期限などを設定し、達成基準を明らかに
3. 楽しさと達成感をプラス
 - ・ゲーム的な要素を取り入れ、単調になりがちな日常のタスクにも楽しさや達成感を付加
4. あなただけの秘書
 - ・アプリのAIが上記のことをあなたの過去の達成度、傾向から得意分野と苦手分野を分析。あなたの成長に最適なオーダーメイドのクエストを生成



RPGチーム



高1 Social Innovationゼミ



武蔵野大学
附属幼稚園

年に一度の発表会で園児たちの成長を実感！

12月6日、武蔵野大学附属幼稚園の発表会が行われました。1年を締めくくる大イベントに園児たちは緊張しつつも元気に舞台へ。



うわ〜
きんちょうする

日頃の表現遊びを 大舞台でお披露目！

雪頂講堂で行われた発表会は、第一部の年中組からスタート。全員での歌にはじまり、鈴やタンバリンなどを使った『崖の上のポニョ』の合奏を披露した後、どんぐり組は「3びきのやぎのらがらどん」、あさがお組は「さるかに」さくら組は「3びきのこぶた」の劇を先生といっしょに演じました。

芝居の読み聞かせをする中で、先生が子どもたちの反応を見ながら、このクラスにはどんなお話が合うかを考えています。続く第二部では、年少組が舞台へ。大きな舞台に立つのはこれではじめて。みんなドキドキ緊張の面持ちです。先生方がやさしく声をかけながらリードする形で、たんぽぽ組が「ばけけコンテスト」、ちゅーりっぷ組が「こそうを食べに」、すみれ組が「ころころたまご」を披露しました。年少組は、日頃から先生といっしょに行っている『表現遊び』を大勢の人の前で元気に演じました。



あじさい組 別府 涼子 先生

終演後には思わず 「さーこうー」の声も

大トリの第三部は年長組。ディズニードレーの合奏から、あじさい組の「森の仲間とおぼけたち」、ひまわり組の「人魚をすくえ」、すずらん組の「バナナのぼうけん」へと続きます。舞台のそででは、「うわー、きんちょうする〜」「なんかこころ臓がどつくんどつくんしてきた」など、子どもたちもドキドキ。こちらまで緊張が伝わってきます。いざ舞台に出ていくと、みんな堂々と自分のパートを演じていて舞台袖で見守



ドキドキ
するね

る先生方もホッとされた様子でした。中にはセリフを忘れてしまった子もいたそうですが、舞台上で担任の先生がピアノを弾きながらさりげなくフォロー。締めくくりは、年長組が全員で歌う「ありがとうの花」。間奏では、保護者に向けて、「こはんとおせんたく、ありがとう」「いつもギョッとしてくれて、ありがとう」「ようちえんおくりむかえ、ありがとう」と、子どもたちの素直な感謝の気持ちの声に、客席はさわやかな感動に包まれました。

終演後、子どもたちからは「さーこうー」という声も飛び出し、緊張を乗り越えた先の楽しさを実感したようでした。

結果よりプロセスが大事 表現を楽しむ姿勢を見てほしい

雪頂講堂に集まった園児たちの保護者など500名以上の観客の前で成長した姿を披露した発表会は、大盛況のなか無事に終了しました。会を無事に終えることができたのは、先生方と子どもたちがそれまで準備や練習を積み重ねてきたからでしょう。

「例年、発表会の準備は11月に入った頃から始まりますが、その前の10月末に雪頂講堂で子ども向けの観劇会を行っています。ここで子どもたちに舞台へのあこがれの気持ちを持ってもらってからの準備に入ります」（望月先生）



すずらん組 望月 マキ 先生



あじさい組「森の仲間とおぼけたち」



ひまわり組「人魚をすくえ」



すずらん組「バナナのぼうけん」



大迫力の海賊船！



にゃーにゃー

にゃー



ひまわり組 松岡 佑佳 先生

がリードして準備を進めますが、年長組になると、子どもたちがさまざまに意見やアイデアを出しながら、自分たちで物語を創作するようになる。 「私のクラスでは人魚をテーマにしたのですが、子どもたちの意見をホワイトボードに書き出し、絵も描いてみながらイメージを共有しながらストーリーをつくっていききました。大人が考えつかないような斬新なアイデアも飛び出しますよ」（松岡先生） 「基本的に子どもたちの意見は否定せず、子どものアイデアを尊重しながらも多少整理してお話になるように作り上げていくのが私たちの役割です。役決めについても子どもたちの希望を聞きながら、一つの役を複数の子どもが演じる形になっています」（別府先生）

はっぴょうかい





武蔵野大学附属
有明こども園

元気いっぱい！「うんどうあそび」で体と心を育む

「遊び込む」ことを大切にしている有明こども園では、子どもたちが楽しく遊んで体を動かす「うんどうあそび」を通して、体力や運動能力、さらに規範意識やコミュニケーション力など人と関わる力を育んでいます。

運動指導の専門家が指導 楽しく元気に身体を動かす



KIDS POWER 代表
上田 誠 氏

有明こども園では、週1回、運動指導専門の講師を招き、3〜5歳児のクラスごとに「うんどうあそび」の時間を設けています。

この日は、5歳児の3クラスが跳び箱やドッジボールを元気いっぱい楽しみました。

「うんどうあそび」の時間は、さまざまな幼稚園・保育園や施設で運動指導を行っている上田誠先生(KIDS POWER)が指導を担当しています。子どもたちは、まず上田先生と「おはようございます！」と元気にあいさつ。ジャンプやストレッチでしっかり体をほぐした後、跳び箱の練習が始まりました。

かわりばんこに
じゅうなんたいそう

マットの上でカエルジャンプ 跳び箱を跳ぶ動きを練習

跳び箱の練習は、床に敷いたマットの上で、跳び箱を跳ぶ時の動きをやってみることからスタートしました。マットに両手をつけて両脚で前にジャンプする「カエルのジャンプ」です。上田先生は「いいね！」「上手！」「一人ひとりに声を掛

脚は「じゃんけんパー！」 跳び箱上手に跳べるかな

次はいよいよ、跳び箱を跳び越える動きを練習します。跳び箱のコツは、両脚をそろえてジャンプし、飛び越える時に脚を大きく開くこと。上田先生は、その脚の動きをじゃんけんになぞらえて「最初はグー、じゃんけんパー！だよ」と子どもたちに分かりやすく伝えました。跳び箱の横には先生がいて支えてくれるので、安心です。

3対3でドッジボール 仲間と一緒に「がんばるぞー！」

先生は、うまく飛べたら「100点満点！」、補助を受けて跳べた子にも「ナイス！」と前向きな声掛けをして、子どもたちを盛り上げていきます。跳び箱を跳んだら、ボールで的当てです。全員跳び終わり、上田先生が「楽しかった人？」と聞くと、みんな元気に「はい！」と手を挙げました。

跳び箱の後には、3人グループをつかってドッジボール遊びが始まりました。チームごとに陣を組み、「ぜったいかつぞー！」「がんばるぞー！」と元気に声を上げて、上田先生の合図で試合開始！ ドッジボールは、ボールを強く投げたり、飛んでくるボールから逃げたり、体を大きく使うさまざまな動きを経験することが出来ます。また、少人数チームでみんながボールに触ることができ、ゲーム性もあることから、友達と協力する力、勝ち負けを受け入れる力など情動的な能力も養われます。

人との関わり方が 自然に育つ「うんどうあそび」

「有明こども園の子もたちは、好奇心旺盛で

「幼児期の子どもの運動遊びには、我慢すること、ルールを守ること、コミュニケーションを取ることで、友達の気持ちをくみ取ることなど、さまざまな内面的な力を育む効果があると言われてます。楽しい「うんどうあそび」の時間を通して、基礎的な運動能力や丈夫な体はもちろん、仲間と一緒に頑張る心地良さや進んで取り組む力も伸ばしていきたいですね。」(渡邊園長)



渡邊 光一 園長



ジャンプ!



当てられても
もういっぱいチャレンジ!



やったー!
かったね!



あぶない!よけろ〜



「学問の地平から」

教員が語る、研究の最前線

本学の教員は、教育者であると同時に、第一線で活躍する研究者でもあります。本企画では、多彩な教員陣へのインタビューをもとに、最新の研究と各分野の魅力を紹介していきます。



看護実践における
気づきを教育に

臨床看護学
通信教育部 人間科学部
人間科学科 看護学コース
山花 令子 准教授



医療現場での看護実践の中では、患者の小さな変化に気づき、適切な対応につなげる能力が看護の質を左右します。山花准教授は看護の出発点である「気づき」に着目し、気づきから生まれる臨床実践のプロセスを明らかにする研究に力を注いでいます。気づきを生み出す背景としての道徳的感受性の重要性に目を向け、より良い看護教育、より良い臨床看護実践への貢献を目指す山花准教授の研究を紹介します。



アンコール遺跡に刻まれた
歴史の謎を追う

建築史学
工学部 建築デザイン学科
佐藤 桂 准教授



歴史を学ぶと聞くと、昔の出来事や年号を暗記することをイメージするかもしれませんが、教科書に載っている「歴史」の裏側には、まだ多くの謎が残されています。アジアの建築史を専門とする佐藤准教授が取り組んでいるのは、カンボジアのアンコール遺跡に残る痕跡をたよりに、その建築の歴史に隠された謎を解き明かす研究です。建築技術の推移や人々の思いを読み解くことで、暗記ではなく「考える歴史」の面白さを伝える佐藤准教授の研究を紹介します。



デジタル資産の未来を拓く
法規整のために

デジタル金融法学
グローバル学部
グローバルビジネス学科
鈴木 淳人 教授



デジタル資産、暗号通貨、ブロックチェーン——こうした言葉は今や日常的に耳にするようになりましたが、その法的な位置付けについて、理解している人は少ないでしょう。長年日本銀行に勤務し、法律とIT技術の両方に精通する鈴木教授が現在取り組んでいるのは、この新しい領域の法整備に関する研究です。急速に進化するデジタル経済と法制度の間にはどのような問題が存在し、どのような対応が求められるのか、鈴木教授の研究を紹介します。



子どもも大人も互いに
尊重し合う保育をめざして

保育臨床学・関係学
教育学部 幼児教育学科
義永 睦子 教授



近年、障害の有無等にかかわらず、どの子どもも同じ場で育ち合う「インクルーシブ保育」など、多様性を大切にする保育や教育が広がっています。クラスの中で、多様な子どもたちがお互いを尊重し合う関係を育むためには、どのような保育が求められるのでしょうか。本学の子育て支援室をはじめとする現場での事例や観察を元に、「みんながって、みんないい」を実現する保育をめざして力を尽くす義永教授の研究を紹介します。



観光へのアプローチはさまざま
多様な学生が集う環境で
研究・学びを深める

観光学
グローバル学部
日本語コミュニケーション学科
岩崎 比奈子 准教授



コロナ禍を経て日本の観光産業は回復し、2024年には、国内旅行消費額や訪日外国人旅行者数は過去最高を記録しました。一方で、出国日本人数の低迷や休日に旅行が集中する旅行需要の不均衡、人材不足といった課題が顕在化しています。こうした観光地の実態を学術研究に連結し、学生への教育を通じて諸課題の解決と観光産業への貢献をめざす岩崎准教授にお話を伺いました。



正当防衛の境界と
根拠を問い直す

刑法学
法学部 法律学科
山田 雄大 准教授



私たちに、突然誰かに危害を加えられそうになったら、身を守るためにやむを得ず反撃する「正当防衛」の権利が認められています。原則的に国家が暴力（暴力）の行使を独占する法治国家において、その例外である正当防衛はどこまで許されるのか、という問題に取り組んできたのが、刑法学を専門とする山田准教授です。古くからある正当防衛という法制度の今後、さらに「正当防衛が認められる根拠」という根源的な課題にも向き合う山田准教授の研究を紹介します。



医療における「コンパッション＝
思いやり」の研究を 誰もが幸せ
になれる社会づくりに活かしたい

ポジティブ心理学・精神看護学
ウェルビーイング学部
ウェルビーイング学科
秋山 美紀 教授



看護師としてのキャリアを有する秋山教授は、実践に即したポジティブ心理学の知見から「ウェルビーイング」を探究する第一人者。高齢化が進み、ストレスも増大する現代社会において、私たち一人ひとりが自分らしく、健やかに生きるためのヒントとはいったい何か？ 現在「コンパッション＝思いやり」を研究テーマに掲げる秋山教授に、研究への取り組みと、幸福感を高める思考の習慣について詳しくお話を伺いました。



大企業に負けない
中小企業を応援する
新しい管理会計の体系を追究

会計学(管理会計学)
経営学部 会計ガバナンス学科
佐藤 正隆 講師



「管理会計」とは経営者などが自社の経営状況を把握し、より良い経営判断を行うために必要な会計情報を作成・分析する手法のことです。佐藤講師は「現場主義」の研究者。多くの企業の経営者や会計責任者等に自らインタビューして、企業実体に即した管理会計のあり方を探求しています。特に、「中小企業の管理会計のあり方」について研究を進める佐藤講師の研究を紹介します。



ソーシャルワークの理念と
実践をつなぐ基盤づくりのために

精神保健福祉学
人間科学部 人間科学科
岩本 操 教授



うつ病や認知症をはじめとする精神疾患は、誰でも罹りうる病気です。精神科病院等で患者の相談支援を行い、退院後の生活環境を整えるソーシャルワークの専門職・精神保健福祉士は、近年国内でニーズが高まっています。一方、現場では、自らの理念と現実の間で矛盾や葛藤を抱える精神保健福祉士も少なくありません。あるべき姿と現実の乖離を埋める実践モデルを探り、ソーシャルワーク実践の基盤形成に力を注ぐ岩本教授の研究を紹介します。



デザイナーの思考法から世界を
幸せにするイノベーションを

ウェルビーイング学・創造学
アントレプレナーシップ学部
アントレプレナーシップ学科
芝 哲也 教授



技術の進歩や価値観の変化に伴い、今のさまざまな場所で求められている「イノベーション」。デザイナーとして自ら事務所を構えて活動する芝教授は、自身の経験をもとにイノベーションを起こす発想力やクリエイティビティを鍛えるメソッドをまとめ、社会人や学生への教育にも力を注いでいます。ウェルビーイングとイノベーションを掛け合わせ、「世界の幸せをカタチにするイノベーション」の創出を目指す芝教授の本学での取り組みを紹介します。



まちづくり・住まいや行動と
経済との関わりを分析

都市経済学・行動経済学
経済学部 経済学科
沓澤 隆司 教授



大都市圏の不動産価格の高騰、少子高齢化に伴う地域の活力低下、災害への備えなど、都市は今、さまざまな課題に直面しています。そうしたまちづくり・住まいや行動の選択に注目し、経済との関連性を理解する研究に取り組んでいるのが、沓澤教授です。旧建設省で土地・住宅政策に携わり、現在はパンデミックや働き方の多様化など環境の変化が都市の暮らしと経済に与える影響を分析して、正しい情報を発信しようと尽力する沓澤教授の研究を紹介します。

Pick up!
学部の詳細はこちら



通信教育部に新設!
記者発表会を開催

国際データサイエンス学部の特色を発信



学長 小西聖子

国際データサイエンス学部長 就任予定
データサイエンス学部長
清木 康



デジタル庁 総括官付参事官
浅岡 孝充 氏



株式会社CustomerPerspective
代表取締役 絆川 謙 (かせがわ けん) 氏



データサイエンス学科
石橋 直樹 教授 (司会進行)

記者発表会ではまず、清木教授が、AIとデータサイエンスで国際的・地域的な課題に立ち向かう新学部像を示しました。「ローカルな知見をグローバルに昇華する」を理念に、いつでもどこでもデータサイエンスの研究ができる学部として、地域から世界の課題に取り組み、自分の新たなプロダクトを生み出す学部にしていきたい」と力強く抱負を語りました。

**データサイエンスを学び
ローカルな知見をグローバルに昇華**
武蔵野大学に2026年4月に新設される「通信教育部国際データサイエンス学部」に関する記者発表会が1月27日、有明キャンパスで開かれました。

武蔵野大学に2026年4月に新設される「通信教育部国際データサイエンス学部（略称MIDS）」に関する記者発表会が1月27日、有明キャンパスで開かれました。学部長就任予定の清木康教授（データサイエンス学部長）、小西聖子学長、有識者によるトークセッションを通して、居住地にいながらにして国際的な研究環境でAIやデータサイエンスを学べる新学部の魅力を発信しました。

トークセッションでは、データサイエンス学部の石橋直樹教授が進行役を務め、小西学長、清木教授、デジタル庁総括官付参事官の浅岡孝充氏、カスタマーパースペクティブ代表取締役の絆川謙氏（データサイエンス学部客員教授）の4人が、新学部の展望について語り合いました。

**課題の発見から解決まで
自ら実践できるDX人材を育成**

断の説明および多言語対応の実現について説明しました。



データサイエンス学部
中島 勇二 さん

続いて、データサイエンス学部2年の中島勇二さん、海外協定校であるモンクット王工科大学（ラートクラバン校情報技術学部3年のワティティン・プログラムファイさんが、それぞれ研究活動と成果を報告。中島さんは、2025年に国際会議で発表した研究「AIによる対話図検出」の概要を英語で紹介し、ワティティンさんはオンラインで「AIによる医療診断の説明および多言語対応の実現」について説明しました。



小西学長は「行けないから通信制に」ではなく、ローカルにすることに非常に意味がある、新しい形の学部」と述べ、武蔵野大学全体で現場での体験と実践を重視していることを紹介。清木教授が「これから求められるのは、技術を設計し、その応用を考え、社会にどう展開されるかまでデザインできる人材。MIDSではそうした人材を育て、武蔵野大学が掲げる「世界の幸せをカタチにする」に貢献したい」と述べ、会を締めくくりました。

デジタルを使う課題の発見、共有、ゴール設定、解決ができる人材を求めている。それを実践的に学べる新学部の新設は、非常に時機を得た取り組み」と評価。絆川氏もそれに共感した上で、「地域の現場が抱える高齢化、過疎化といった課題は、ほかの多くの地域にも共通する課題。局所的な課題解決からスタートし、その解決策を横展開することで、グローバルな課題を解決できる可能性がある」と、MIDSの教育に期待を寄せました。



体験連動型フィールドワークで社会環境課題に挑む！データサイエンス学部が東京学館浦安高等学校との高大連携授業を実施—

12月17日、有明キャンパスにてデータサイエンス学部と東京学館浦安高等学校（千葉県）による高大連携授業を実施しました。データサイエンス学部の佐々木 史織准教授の指導のもと、東京学館浦安高等学校の生徒12名が参加し、最新のテクノロジーを活用した環境調査とデータ分析を体験しました。本取組は、高校生にデータサイエンス分野への理解を深めてもらい、自身の進路について主体的に考える機会を提供することを目的としています。データサイエンスは現代社会の基盤技術であり、その学びの広がり伝えるべく、大学の専門的なリソースを活用した授業が企画されました。



有明キャンパスで調印式を開催
北海道共和町と地方創生に関する連携協定を締結

学校法人武蔵野大学（東京都江東区、理事長：横山 尚佳）は北海道共和町（町長：成田 慎一氏）と地方創生に関する連携協定を締結しました。締結に伴い、11月19日に武蔵野大学有明キャンパスで調印式を執り行いました。本協定は、地域と教育機関が協働して、次世代を担う若者が地域の課題や魅力を学ぶ機会を創出することを目的としています。法人が設置する千代田中学校・高等学校及び武蔵野大学中学校・高等学校での連携を皮切りに、大学における地域との包括的な連携や教育プログラムの開発へと発展させていくことを目指しています。



2024年から継続！工学部建築デザイン学科の学生が西東京市の「交通ルール啓発ツール」を作成

工学部建築デザイン学科の伊藤 泰彦教授と伊藤研究室の4年生林崎 智之さん、田邊 拓巳さん、木澤 花夏さん、久保田 祐朱さんが、西東京市の「交通ルール啓発ツール」として「放置自転車撲滅」、「自転車乗車時のヘルメット着用」、「違法駐車禁止」の3種のポスターをデザインしました。学科での学びを生かし、「建築模型」を活用した影絵のデザインで何気ない行為とそこに潜むリスクを、模型と影の2つで表現しています。11月14日には西東京市の池澤 隆史市長を表敬訪問し、完成したポスターとポケットティッシュを進呈するとともに、学生の活動について報告をしました。



学生の視点で新図書館の共用空間を提案—工学部建築デザイン学科の水谷研究室が新図書館学生ワークショップを開催—

武蔵野キャンパスで進む新図書館整備にあたり、学生の視点から共用スペースの活用方法を提案する「武蔵野大学新図書館学生ワークショップ」を開催しました。本ワークショップは、建築デザイン学科の水谷 俊博研究室が運営・企画を担い、複数学科の学生が協働して新図書館の空間づくりを考える実践型プログラムです。本取組には、計7学科が参加。異なる専門分野をもつ学生が混成グループを組み、日常のキャンパス利用体験を踏まえながら、「こんな場所があったらいい」「こう使えたら心地よい」といった利用者目線のアイデアを出し合いました。



伊藤羊一学部長から学ぶアイデア発想の極意—キャリアセンター主催イベント「アイデア発想の創造術」を開催—

2月2日、キャリアセンター主催イベント「アイデア発想の創造術」を、アントレプレナーシップ学部と共同で開催しました。当日は、アントレプレナーシップ学部長の伊藤 羊一教授が講師として登壇し、所属キャンパスを問わず集まった各学部1~4年生 計10名の学生に対して、アイデア発想の考え方や発想を生み出すための具体的な方法について熱く語りました。今後、キャリアセンターでは、学部間の垣根を越えた連携を強化し、学生が柔軟な発想で社会課題に挑み、自らの可能性を広げられる機会を継続的に提供してまいります。



バナナから紙を作る!?小学生がSDGs体験—サステナビリティ学科×企業×国際団体で連携！体験型ワークショップを開催—

工学部サステナビリティ学科 高橋 和枝教授のラボは、株式会社チョイスホテルズジャパンおよびOne Planet Café Zambiaと共同で、小学生を対象とした体験型ワークショップ「SDGs×バナナペーパーで地球にやさしいアートをろうろ！」を、1月17日にTKP秋葉原カンファレンスセンターにて開催しました。本イベントは、SDGsやサステナビリティを「知る」だけでなく「体験を通して学ぶ」ことを目的に実施されたもので、当日は小学生12名とその保護者、ならびにサステナビリティ学科の学生・教員、企業・団体関係者合わせて約40名が参加しました。

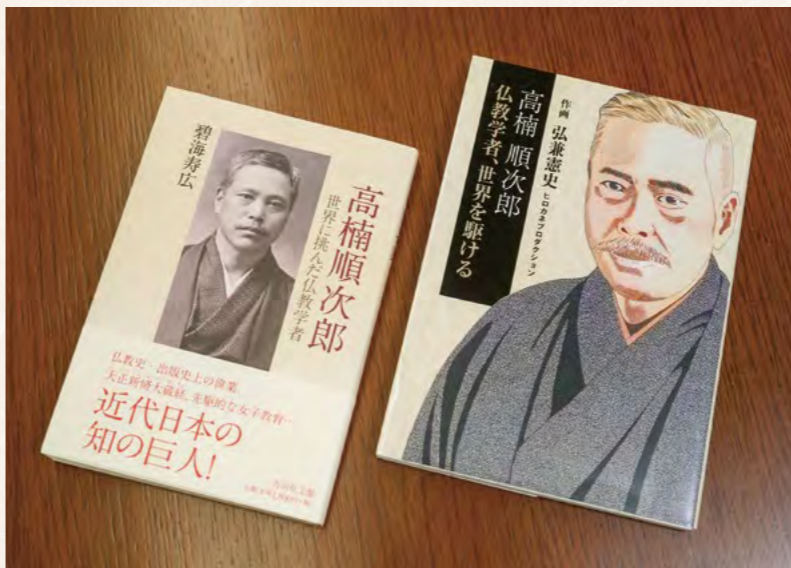


建学の精神

廣瀬 舟雲
教育学部 教授
廣瀬 裕之

学祖追想

武蔵野大学 副学長／教養教育部会教授 石上和敬



創立100周年の記念に刊行された『高楠順次郎—世界に挑んだ仏教学者』と『高楠順次郎—仏教学者 世界を駆ける』

2024年に本法人は創立100周年を迎え、さまざまな記念事業が遂行されましたが、建学の精神の立場からは碧海寿広教授による伝記『高楠順次郎—世界に挑んだ仏教学者』、そして漫画家弘兼憲史さんによる漫画本『高楠順次郎—仏教学者 世界を駆ける』という二冊の学祖本の刊行により、学祖の生涯やその教育理念などへの理解を有缘の方々に向けていただけただけは、大きな意義を持つものと思わせていただきました。

このような創立者の業績や思想に理解を深める試みは私立大学では珍しくないようで、慶應義塾大学では福澤諭吉の自伝『福翁自伝』、早稲田大学では『大隈重信と早稲田大学』という新書本を新入生に配布しているとのこと。創立者への理解や敬慕の思いは、愛校心を育むうえで重要な要素となっているのであります。

跡をのこした学祖の人物像を簡潔にまとめている、教え子で学祖の東京大学での後任でもある辻直四郎先生（東京大学名誉教授・インド研究者）による学祖評の一部を紹介します。主に四つの観点から学祖を評するものです。

(1) フランスのインド学の著名な学者が来日された際、選歴を過ぎた学祖もその講義を聴講された。「先生も熱心な聴講者の一人で、東西インド学の両巨匠が講壇をさし挟んで相会した有様は忘れられない。ここに先生の学究としての若さがあり、学問に対する熱意を後進に示す教訓があった」（引用文中の「先生」は学祖のこと。以下同）

(2) 弟子の指導においても「門人の各々が進むべき方向を感じて、その素質を曲げずに指導された先生は寛容と明察とを備えた偉大な教師であった」

(3) 「大正新脩大藏経」などのいくつかの大事業を完遂された姿を見て「ウパニシャッドといい、大藏経といい、先生は大規模な仕事を好まれた。先生の広大な気宇と不屈の意力とを反映したものである。集大成者としての先生の識見と精力とを私は常に讃嘆する」

(4) 先生の人柄については「先生は沈黙の中に細かい思いやりをはたらかせ、厳格の中に深い人情をたたえていられた。うづ然たる大家、偉大なる先覚者、温情あふれる師匠、信頼すべき大人格者、先生を想うたび、これが私の心に浮ぶ映像である」

いかがでしょうか。ふたたび学祖の伝記や著作物を紐解いてみようという気持ちになっていただけたら望外の喜びです。

「高楠順次郎自筆日記」

本学には、学祖高楠順次郎先生の自筆日記が保管されています。日記は1年1冊ごとに市販の日記冊子に学祖自身が自筆で記したものであり、合計13年分※が現存しています。この度の100周年記念事業の一環として当該日記の翻刻本を武蔵野大学出版会から刊行することになりました。

大正9年以降といえ、学祖が50歳を超えて教育研究をはじめ、さまざまな活動が円熟期を迎え、社会的にも高い評価を受けていく時期と重なります。その意味で、日記の内容自体は事実関係の簡潔な記載が中心ではありますが、学祖の多彩な、そしてスケールの大きい諸事跡を辿るには好適な史料と言えます。出版を楽しみにしていただけたいと思います。

※大正9年、14年、昭和2年、3年、6年、8年、15年



学校法人武蔵野大学 後援会

お祝いメッセージ

ご入学・ご入園おめでとうございます

このたびは、ご入学・ご入園、誠にありがとうございます。新入生の皆さまと保護者の皆さまの新たな門出を、心よりお祝い申し上げます。

新しい学びの場に一歩踏み出されたことは、これから始まる多くの出会いや経験への第一歩です。新たに多くの先生や友だちと出会い、学ぶ楽しさを知り、時には悩みながらも、一つひとつの経験を積み重ねていくことで、お子さまたちは確かな成長を遂げていかれること存じます。その歩みが実り多いものとなることを、心より願っております。

保護者の皆さまにおかれましては、この日を迎えられるまで、期待とともに、さまざまなご苦労や心配もおありだったことと存じます。これまでお子さまを温かく見守り、支えてこられた皆さまの深い愛情とご尽力に、改めて敬意を表します。



学校法人武蔵野大学 後援会会長 佐野 幸雄

です。保護者の皆さまからお預かりした会費をもとに、「教育活動の充実」「学生・生徒・園児の支援」「教育環境の整備」に取り組んでおります。主な活動の一つとして、家計が急変し修学が困難となった学生・生徒・園児への奨学金給付があり、経済的事情に左右されることなく学びを継続できるよう支援しております。こうした取り組みを通じて、子どもたちが安心して学び、健やかに成長できる環境づくりを支えております。

後援会といたしましては、今後も学校と連携しながら、保護者の皆さまと力を合わせ、子どもたちの学びと成長を支えてまいります。新しい生活が、お子さまたちにとって実り多く、そしてご家庭にとって喜びに満ちたものとなりますよう、心より念願申し上げます。

この度は、ご入園・ご入学おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。4月は新たな環境での生活が始まる方が多いかと思いますが、期待と不安を抱えてのご入園、ご入学であるかと拝察します。後援会が皆さまのご不安解消の一助となりましたら幸いです。

よく、失われた〇年と言われます。その〇年の起点は1990年初頭のバブル崩壊時期を指すことが多いかと思いますが、1985年のプラザ合意がバブル崩壊の端緒（起点）と考えますと、2025年と2026年は、失われた40年の終わりの年、新たな40年の起点の年になります。（1985年の40年前は1945年の終戦の年です。）

新たな40年を担う新入生の皆さまのご健勝とご活躍を願っております。



学校法人武蔵野大学 後援会副会長 田中 清進

つになります。こうしてひとつの場所に集うことができるのもご縁以外の何物でもありません。どうかこのご縁を大切に、将来に向けて充実した毎日をご過ごしてください。私たち大人も全力で応援いたします。

皆さまの大きな成長とご活躍に期待いたします。



学校法人武蔵野大学 後援会副会長 中野 新吾

令和7年度後援会主催 教養講座の開催について

第94回教養講座は、12月13日(土)に開催しました。講演はインターネットでも配信をおこないました。

12月13日、武蔵野キャンパス雪頂講堂にて開催された本講演では、国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部長、薬物依存症センターセンター長の松本俊彦先生をお招きし、若者の市販薬オーバードーズ(OD)について、臨床経験にもとづく最新の動向と背景を講演いただきました。

松本先生はまず、覚醒剤など違法薬物の使用者が減少する一方、市販薬・処方薬依存が増している現状を示し、薬物依存の現状が大きく変わっていることを指摘しました。最新の調査では、かつてのような違法薬物の患者数は減少している一方、市販薬に依存する患者数が違法薬物を上回り、特に、2016年には薬物依存患者全体の25.0%程だった10代のOD患者が、2024年には71.5%を占めるまでに増加していることが示されました。

この若者のODには、学校に通いながら周囲に気づかれないように依存が進んでしまうケースが多いこと、そして約8割の人に自傷行為が見られるという特徴があり、彼らにとつてのODが、「死ぬための手段」ではなく、どうしても耐えられない不安や心の痛みを和らげるための「自分なりの調整法」として行われることが多いと説明されました。その背景には、家庭不和や学校生活での生きづらさなど、若年層特有の心理的負荷があると指摘されました。

さらに松本先生は、市販薬が乱用される要因について、市販薬には依存性の強い成分が含まれていることに加え、ドラッグストアの増加や販売規制の緩さ、登録販売者



制度の変化、医療費抑制政策、ネット販売の普及など、社会的な要因が複合的に乱用を後押ししていると指摘し、「市販薬だから安全」という認識を改める必要性を強調されました。

終盤では、自殺予防教育の課題について、「命を大切に」という指導が虐待やいじめに苦しむ子どもにとって負担になる可能性があるあることを指摘しました。ODを行ってでも生きている若者の行動を、まずは否定せずに受け止める姿勢が重要であること、そしてその背後にある家庭の困難にも目を向け、家族を含めた支援の必要性を強調し、講演を締め括りました。

アーカイブ配信はこちら



令和8年度後援会主催行事について

後援会では例年、後援会総会、保護者面談会、教養講座など、保護者の皆さまを対象に行事を実施しています。令和8年度につきましても、下記の主催行事の実施を予定しています。

- 《後援会総会》 5月中旬に、インターネットを活用し、事業報告や予算を資料にて確認していただき、審議をお願いする予定です。
- 《大学説明・保護者面談会》 保護者向けウェブサイトにて各学科の説明動画等を掲載し、面談を希望される保護者の皆さまには、対面またはオンラインで個別面談を実施する予定です。
- 《教養講座》 7月と12月に開催を予定しています。講師については現在検討中です。

各行事の詳細については改めてご連絡させていただきます。大学公式ウェブサイト内の後援会ページを随時更新しておりますので、ご確認くださいませようお願いいたします。

後援会ページ
<https://www.musashino-u.ac.jp/kouenkai/>

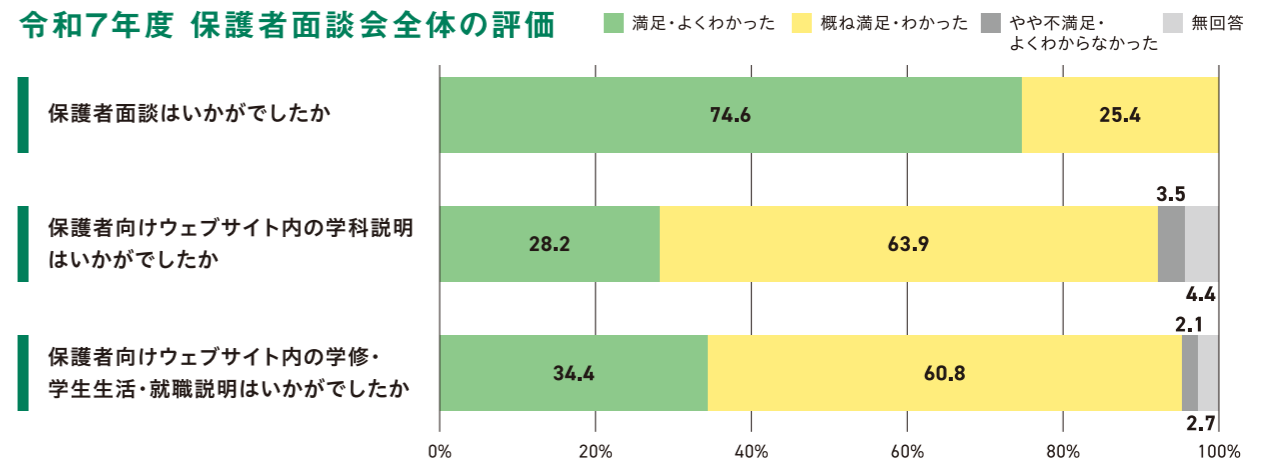
随時更新しておりますので
 ご確認ください。



令和7年度 保護者面談会

武蔵野大学における学修・学生生活・進路指導等の基本的な考え方や指導方針にご理解をいただくため、令和7年度は、保護者向けウェブサイト上に各学科の動画及び関連資料を掲載して、情報発信を強化いたしました。また、教員との面談を希望される保護者には、武蔵野キャンパス(10/11)、有明キャンパス(11/15・16)にて、対面もしくはZoomのオンラインによる個別面談を実施し、多くの保護者にご参加いただきました。

令和7年度 保護者面談会全体の評価



保護者からのご意見など

【保護者面談について】

- 今回の保護者面談会は、とても分かりやすく有意義な時間でした。(日本文学文化学科)
- 大学の教育方針等、とても素晴らしいと思いました。個人面談も丁寧で、先生に感謝いたします。ありがとうございました。(社会福祉学科)
- 面談を通じて、進路や資格についての理解が深まりました。今後とも学生が主体的に学び、将来に希望を持てるようなご指導をお願いできれば幸いです。(建築デザイン学科)
- アドバイザーの先生に直接お時間を割いていただき、感謝しております。今後とも大学での学びが充実したものになるようご支援いただければ幸いです。(グローバルコミュニケーション学科)
- 開催時期がもう少し早いと良いと思いました。(グローバルビジネス学科)

【学修・学生生活・就職説明・学科説明について】

- 授業や学科行事の様子はよくわかったのですが、学生に対するサポート体制について紹介があるとありがたく思いました。(教育学科)
- アドバイザーの存在や単位の取得方法がわかった。(法律学科)
- 学年ごとの詳細な説明資料がほしいと思いました。(薬学科)
- 資格を取ることが、具体的に社会で活躍できることにつながっていくことがよく分かりました。(人間科学科)

後援会奨学金

武蔵野大学後援会では、保護者等の学費支弁者の死去・病気・離職および罹災等により、家計の事情が急変し、学修が著しく困難となった学生に対して奨学金給付を行っています。

授与式では石上和敬副学長より奨学生へ激励の言葉があり、奨学生代表へ給付決定通知書が授与されました。奨学生代表が感謝の言葉と共に、将来の展望について抱負を述べました。

